

ク
マ
ヅ!
2
じつぽてお兄ちゃん

COOL MASAOKHIST

小説 栗栖テイナ
挿絵 大空樹

立ち読み版



兄
マ
x

登場人物紹介

Characters



誰にでも優しいのは兄さんの
美点だけれど、それも善し悪しよ。



さくらさきかなで

桜咲 奏

文武両道で人気者の美少女。
兄の理希からもらった、氷を
象った髪飾りをいつも大事そ
うにつけている。大きな秘密
を抱えているようだが……？

さくらさきりき
桜咲理希

本作の主人公。中性的な外見で、男女から可愛がられる少年。妹のことを大切に思っている。

きしゅうと
岸優斗

舞梨亜、凜菜、杏樹のご主人さま。彼女たちといっしょに、同じ境遇の理希にアドバイスをくれる。

さいぎょうじりんな
西行寺凜菜

桐生学園の副会長であるお嬢さま。露出狂の気がある。



きつたかあんじゅ
橘高杏樹

生徒会の書記を務めるボーイッシュな女の子。被虐癖がある。

ほしのみやまりあ
星乃宮舞梨亜

桐生学園の生徒会長。実は極端なマゾヒストな性癖を持っている。

序章	妹のヒミツ	007
一章	妹のイケナイ願望	018
二章	ご主人さま、プロデュースします。	077
三章	止められない想いと衝動	145
四章	ずっとしつけて、お兄ちゃん	199
終章	受け継がれる？ 生徒会のヒミツ	252

序章 妹のヒミツ

「——見て。全部……見て」

真円を描く月が、空の頂点を飾る夜更けの頃。

昼間、子供達の甲高い歓声で満ち溢れているのが嘘のように静まりかえった公園の中央で、一人の少女がソプラノの美しい声で呟いた。

腰の辺りまで伸びた、ロングウェーブの茶色い髪。少し細められた瞳は、夜空をそのまま映し出したような、深い色合い。じっと見つめていると吸い込まれてしまいそうな、妖しい美しさを感じさせる。

スツと整った鼻筋、薄く紅の引かれた小さな唇。上品で大人びた魅力を漂わせる美少女は、傍らに立つ街灯に照らされながら、ゆっくりと周囲を見渡していた。

動きに合わせて揺れる長い茶色の前髪で、雪の形を模した髪飾りがキラキラと輝く。

スポットライトに照らし出された、アイドル——そのクールで物静かな雰囲気には、銀幕の新鋭女優という表現の方が相応しいかもしれない。

立っているだけで人目を引く、静かだけれど確かな魅力が滲み出ている。

「誰か……早く」

再び宵闇の公園に響く、少女のソプラノ声^{ボイス}。その深い色の瞳同様、感情が読み取れない淡々とした呟きに合わせて、透明のマニキュアが塗られた指が胸元へ伸びていく。

深夜とはいえ、秋の終わりの時期には少々仰々しい、黒のロングコート。

その機能重視の無骨なデザインは、明らかに女物ではなく男物。少し大きめで、少女の肢体はボディラインがよくわからないくらい、すねの辺りまで覆われている。

そんな中、一箇所だけ過剰に自己主張している胸元。黒いコートの布地が、今にもはち切れんばかりに持ち上がっていた。

「私、こんなところで……あ……」

ぽつりぽつりと呟く声に合わせて、少女の指がその豊かな胸元の上辺りから、順々にコートのボタンを外していく。

鎖骨の辺りから、豊かすぎるほど大きな隆起の頂点。

閉じられていたコートの前が少しずつはだけていき、みぞおちくらいまでボタンが外されたところで、押し込められていた双乳がぷるんと盛大に揺れながら飛び出した。

おそらくメートルサイズを超えている。『巨』では物足りない、『爆』と前につけるのが相応しい乳房。雪のように白く澄んだ肌。そしてふくらみのてっぺんを飾る、十円玉ほどの大きさの桃色乳輪。豆粒くらい可愛い可愛らしい突起。

ブラジャー、更にその上に羽織る何枚かの着衣で隠されているはずの部分が、惜しげも

なくさらけ出されてしまっていた。

「誰か……誰か……」

願うように繰り返し呟き、そのままコートのボタンは下の方まで外されていく。

その切なる願いに応えるように、少し離れた茂みに隠れた瞳が、大きく見開かれた。

「なっ、えっ、あっ、あ……」

深い茂みの中。元々小柄な身体を更に縮こませて隠れ、葉の隙間からロングウェーブ髪の少女を見守りながら、桜咲理希さくらさきりきは言葉にならない呻きを漏らしていた。

肩ほどの長さに揃えられた、少女と同じ茶色の、少し癖がある髪。

見開かれた瞳はくりつと丸く、まるでリスかハムスターのような愛くるしさがある。

ほんの少し赤く色づいた頬、そこ以外は雪色の柔らかそうな肌。

男女を問わず、思わず目尻を下げてしまうような可愛らしい美少女……に見えるが、理希が『少女』ではないことを、唯一、ズボンの股間にできあがったこんもりとした盛り上がり強烈に主張していた。

「な、何やってるんだろう、僕。鎮まれ……鎮まれて！」

自らの身体の反応に気づき、右手でその部分をしっかりと押さえながら呟く。

だが、ズボン越しのそんなわずかな刺激に、精力旺盛な年頃の屹立はますます反応を大

きくしてしまふ。

「こんなことしてる場合じゃ……うっ、あつ」

そうしている間に、街灯の下の美少女はコートのボタンを残らず外し、ついにその前を大きく広げてしまつていた。

サッカーボールを半分につけて並べたような、目を見張るサイズの爆乳。それと比べるとあまりにも頼りなく、ほっそりとくびれた腰。

更にはその下、髪と同じ色のわずかな毛に覆われた恥丘。むっちり柔らかかそうな太股が特に目を引く脚線美。そのすべてがあらわになつてしまつている。

隠れているのは背面部と、黒のニーソックスで包まれたふくらはぎの辺りだけ。

「見られちゃう。いつまでもこんなところにいたら、本当に……見られて……ふああ」

少女は熱っぽく息を切らして呟きながら、巨大サイズの乳房を両手で抱え、恍惚と背筋を震わせ始める。

持ち上げられた双丘は軽く横長に弛み、プルプルと音が聞こえそうな迫力で揺れる。

「はあ、はあ……こんなの……んっ、ううっ」

目前の痴態に視線が釘付けになり、ズボンの中で息苦しいくらい剛直が勃起する。

正常なら男なら、身体が反応しても当然。むしろそうならなければ、男性機能を疑う必要があるほどの、艶めかしく扇情的な光景。



このままじつくりと觀賞し、自らを慰めたいところだが——少年には、素直にその欲情に身を任せられない理由があった、

「奏、何やってるんだよ……」

何故なら——恍惚と肌を見せつけている少女の名は、桜咲奏。

彼にとつてもつとも身近な女性。文字通り、生まれたばかり——赤ん坊の頃から傍にいた……たつた一人の血の繋がった妹なのだから。

(どうして、奏がこんなこと!? ……わけがわからないよ)

夜遅く。普段は早寝の妹が、珍しく外出したのに気づいたのが始まりだった。

『いったい、どこに?』

漠然と込み上げてきた疑問。兄妹とは言え、プライベートを詮索し過ぎるのはどうかと思つたが、どうしても気持ちを抑えきれず、こっそりとつけてきてしまったのだ。

(夢……じゃないよね。ありえないよ、あの奏が……)

成績優秀、品行方正。いつも自分のペースを崩さないクールな態度と、そこらのアイドルが足下にも及ばない美貌。

兄と同じ、家の近所にある桐生学園きりゅうがくに通う奏は、一年生にして『次期生徒会長長間違いなし』と称され、男女問わず多くのファンを持つ人気者。

『女の子みたい』と言われる顔立ち以外、何も取り柄のない理希が密かにコンプレックス

を抱いてしまっているくらい、完璧人間だ。

そんな妹が、夜更けの公園で自ら肌を晒している。あまりに現実感がない光景に、頭の中がぐちゃぐちゃで、まともに考え事もできない。

よく似た、まったくの別人ではないか。そんなばかげた考えも、奏の前髪の髪飾りに否定されてしまう。あれはもうだいたいぶ前、自分が誕生日プレゼントとして渡したものだ。

冬生まれで、クールなイメージの彼女によく似合うだろうと、学生の身分ではかなり奮発して購入した、オーダーメイドの特注品だ。同じものが、二つとあるわけがない。

(どうということなの、本当に……)

「こんなところ見られたら、襲われちゃう……知らない人に犯されて、汚されてえ……」
覗く兄の視線に気づくことなく、妹は背筋をくねらせ、危険な妄想に酔いしれていた。

この状況で気持ち昂ってきているのか、雪色だった頬がイチゴシロップを垂らしたような紅色に染まり始め、吐息もどんどん荒くなってきている。

普段、何を考えているのか兄である理希でもわからないときがあるクールな表情も、頬が緩んで唇が綻び、少しずつ蕩けかけてきていた。

(それに……む、胸……乳首が……)

小学校低学年。まだ一緒に入浴するのが当たり前だった頃以来に見る、そのときの平坦さが嘘のように大きく隆起した双乳。

頂点を飾る突起が、目に見えて大きくふくらんできている。

もちもちと弾力たつぷりに揺れる乳肉とは違い、見るからに硬そうな乳首。

「摘み上げて欲しいと言わんばかりに震えているその部分を見ると、股間に感じる耐え難いほどの熱い疼きが、更に強くなってきた。

「何を考えているんだよ、僕は。い、妹の裸見て……っ……止めないと」

口に溜まった生唾を飲み込みかけたところで我に返り、自分を叱咤する。

めまいがするほど鼓動も高鳴ってきているが、いつまでもこうして見学しているわけにはいかない。この時間、この辺りはまず間違いないはずだが、それでも可能性は決してゼロではないのだ。

（でも、どうしよう。いきなり飛び出したら、僕が覗いてたことバレちゃうし……それに奏も気まずいだろうな。と言うか、僕もそうだし……ううっ）

悩んでいる間にも、誰かが来るかもしれない。わかっていても飛び出せず、ただ頭を抱えてうなっていた——その最中。

「ふむ、これは……なかなか、面倒な状況のようだ」

不意に背後から聞こえてきた、淀みなく凜とした、美しい声。反射的に振り返った理希は、そこに立っていた人物の顔を見つめ、悲鳴も上げられずに声を失ってしまった。

「あっ……あの……えっ……き、君は……」

「こんばんは、星が綺麗ないい夜だね。もつとも……君は、今、そんな風情を楽しむようなゆとりはないかな」

ラベンダー色の長いストレートヘアをかき上げ、微笑する少女。

全体的に脂肪の少ない、引き締まった肢体。胸元だけが人並みより大きめの魅力的なスタイルが、羽織っている白いコート越しにもわかる。

取り乱す理希とは一転して、眉一つ動かさない、落ち着いた立ち居振る舞い。

年齢に似つかわしくない威厳と風格を備えた美しい少女は、理希が——いや、桐生学園に通う者なら、誰もが知っている人物だった。

星乃宮舞梨亞^{ほしのみやまりあ}。一年の頃から生徒会で活躍し、二年生となった今は生徒会長として辣腕を振るっている、人気、実績共に桐生学園の歴史に名を残す人物。

そして同じ二年生である理希にとっては、クラスメイトの一人なのだ。

「ど、ど、どうして……」

「野暮用でこの公園にいたのだけれど、聞き覚えのある声でしたから、ちょっと覗きにきてみたんだ。……ふふつ、まさか、こういう状況とは」

絶句する理希へ微笑みかけながら、クールな生徒会長はすぐ隣にしゃがみ込んだ。

ふわりと漂い、鼻腔をくすぐる甘酸っぱい香り。香水だろうか、嗅いでいると妙に胸がドキドキとして、落ち着かなくなる。

「……あ……兄さん、そこ……元気になってる？」

「えっ？ あ、こ、これは……」

潤んだ深い色の瞳を細め、奏がじっと見つめる少年の股間。夕方も、あんなにたくさん放つとは思えないくらい大きくふくらんだそこは、言い訳しようのない勢いだ。

それでもそこを片手で隠し、どうにか誤魔化そうと言葉を探し始めたとき。

コツコツ……今度は間違いない、こちらに向かつて近づいてくる足音が聞こえてきた。かなり早足で、音もはつきりしている。姿が見えるまで、あまり余裕はないだろう。

「ふあ……に、兄さんっ……」

「奏……えっと……こっちだっ！」

不安げに顔を強張らせる妹を見て、理希は反射的に駆け出した。

胸揉みの卑猥な体勢のまま凍りつく妹を抱き締め、そのまま傍の路地へ駆け込む。

「うっ、せ、狭い……」

並んだマンション同士の隙間。かなり窮屈な細道に、壁にもたれかかるよう身体を横にして入り、そのまま息を殺して足音が過ぎるのを待つ。

わずか数秒後。人影が、さつきまで自分達が立っていた場所を通りすぎ、そのまま止まることなく遠ざかっていった。

何度経験しても慣れない、心臓が止まりそうな不安と恐怖。深く息を吐き、抱き締めて

いる妹の顔を見つめる。

「奏、もう大丈夫……だ……って……えっと……」

互いに壁を背にし、向き合っている兄妹。同じくらいの背丈だけに、その顔は鼻先が触れそうな至近距離に迫っていた。

「兄さん……硬い……んふっ、はあ、わ、私のここお……食い込んで……」

「ふえ……んくっ、うあっ、うううっ！」

ニチュツと淫媚な水音が響く度、ズボンのふくらみに熱く濡れた感触が伝わってきた。

腰を押しつけるようにして抱き合っているせいで、膨張した股間がちょうどメイド妹の股間へ食い込む形になってしまっている。

穴あきの股布から覗く、ぷっくりと柔らかく盛り上がった肉唇。甘い匂いの雫をたっぷりと滴らせるそこがズボン越しに勃起竿を擦り、腰が碎けそうな痺れを感じてしまう。

「兄さん……んふっ、はあ、嬉しい。呆れるくらい、変態な私を見て……こんなにチンポを硬くしてくれるなんて。また、私を使いたいって、勃起してくれてるのお……」

「あっ、う、いや、その……奏、えっと……んっ、くあっ」

このまま押しきられたらまずい、そう思うがヌルヌルの割れ目と密着した剛直は、物欲しそうに脈打ち、勢いを増していく。

耐えられずに身体をくねらせると、胸板がむにゆりと柔らかい感触に強く擦られる。

「くひいつ、ふあつ、ひいいつ！ んあつ、そこ……おっぱい……んんっ！」

「か、奏、声が大きいつて！」

「で、でも……兄さんの身体と、私のここお……おっぱい、グニグニ擦れてるのお」

甘ったるく熱い嬌声を漏らし、恍惚と訴える妹。それに合わせ、少年の胸板で楯円に押し潰れている西瓜大の爆乳が、まるで生き物のようにふにゆふにゆと形を変える。

服越しにもわかる、もっちり艶やかな肌触り。その中でコリッと独特の硬さで自己主張する乳頭が、程よいアクセントを生み出していた。

（やっぱり大きいよな、奏のおっぱい）

昨夜、促されるまま挿まされた、目を見張るメートルオーバーの乳房。胸板の形に沿って弛み、甘えるように隙間なく吸いついてくる。

その柔らかい温もりに、全身が包み込まれるよう。自然と身体の力が抜け、このまま身を委ねてしまいたいような衝動に駆られ、我慢できなくなってきた。

そんな兄の気持ちを見抜いたかのように、クール妹は口元に微笑を浮かべ、自らの爆乳を左右から中央へ寄せるように押し、小声で囁きかけてくる。

「今度は、ここを使ってくれるの？ 私の下品なおっぱい……ここも、兄さんのチンポ専用オナホに……乳マ○コに変えてくれるのね」

「ち、乳マ……いや、あの……」

妹の口から飛び出す、とびつきり卑猥で魅力的な誘い。

咄嗟に言葉を返せずにいると、それを無言の肯定と受け取られてしまったらしい。

奏は嬉しそうに火照る頬を緩めて屈み込み、胸元の大きなハート形の穴を破れそうなくらい左右に広げ、そこから自らの爆乳をすべて零れさせてしまった。

根元を白いエプロンの布地に押され、自然と縦長に潰れてしまっている乳房。メイド少女はその深い谷間を、惜しげもなくズボンのふくらみに押しつけてくる。

「んくうっ、はあうっ！ 奏、ちよ……んっ、ちよっと……うああ！」

股間だけでなく、太股にも感じる、ズッシリとした重量感。割れ目の濡れた熱さとは違う柔らかく優しい温もりに包み込まれ、思わず声が上がってしまう。

「兄さん……んふっ、はあ、もうカチカチで震えてるわ。苦しそう……んっ……」

火照る乳肌でズボン越しに勃起を擦り、切なそうに潤んだ瞳で見上げてくる奏。早く、楽にしてあげたい。

そんな強い想いを感じさせる表情に、少年の理性のタガが急速に外れていく。

（そう言えば、会長が言ってたよな。メイド服には、奉仕がよく似合うとか）

『ご主人さまを、自分の淫らな身体を使って悦ばせる。これも精神的に満たされる、欠かせない行為さ。尽くす悦びは、君もわからなくはないだろう？』

今日一日、奏を満たすために色々と頑張った。そのことに気苦労だけではなく、彼女の

ためになつているといふ悦びを感じてしまつていたのは、確かなことだ。

(これも奏のためになるなら……いいんだよね)

そう強引に自分を納得させ、堪えていた興奮を言葉にして吐き出す。

「奏、ご、ご奉仕してよ。奏の胸……お、おっぱい！ その、乳マ○コ……でさ」

妹を真似て、できるだけ卑猥な言い方で命令し、同時に腰を突き出して意思表示する。

その積極的な求めに、屈み込んだメイド奴隷は待ちわびていたと言わんばかりに淫猥な笑みを浮かべ、小さく頷き返してきた。

「ええ、ご奉仕するわ。私の乳マ○コに、兄さんのチンポの匂いが染み込むまで……」

興奮のあまり普段よりも早口で呟いた奏が、ズボンのファスナーを慣れた手つきで下ろして、その中で窮屈そうにしていた屹立を取り出す。間髪容れず、呼吸に合わせて重々しく揺れていた双丘を両手で持ち上げ、前のめりになつて股間に身体を埋めてきた。

「くうっ、ああっ、奏……くふっ、あああっ!!」

むにゅうっ……そんな音が聞こえてきそうな、柔らかい弾力感が肉槍を包み込む。

手で握られるのとも、膣壺に埋めるのともまるで違う。どこまでも沈んでしまいそうなくらい柔らかく、ある程度まで埋まるとプルンツと瑞々しく弾き返される。

乳奉仕特有と言える、未知の感覚。汗で湿った乳肌が、ゴツゴツと血管が浮かぶほど勃起した竿に隙間なく吸いつき、動くまでもなく夢見心地な快感に襲われてしまう。

「はあんっ、どうかしら……んっ、は、初めてだから、上手に奉仕できないかもしれないけれど……でも、頑張るわ。使えないオナホだって、捨てられたくないからあ……」

「す、捨てるのか、そんなこと……んあっ、くっ、はあっ、うううっ！」

理希が最後まで言いきる前に、メイド少女は身体を悩ましく揺さぶり始めた。

長いウェーブのかかった髪を扇情的に振り乱し、たぶんつと重々しく揺れる巨乳を両手でしっかりと中央へ寄せるようにして抱え、深い谷間に埋まった剛直を抜く。

「はあ、ひんっ、擦れてる……兄さんのチンポ、いっぱい……」

「うん、当たってるよ。あっちこっち……くんっ、はうっ、ああっ！」

まるでゴムボールのごとく、弾み震える巨乳。そこに深く食い込んだ肉傘が、その動きに合わせて捲られるかのように強く弾かれる。

同時に、汗ばんでしっとり吸いつく乳肌に裏筋や竿の根元を熱く擦られ、男根全体がメイトルオーバーのバストにしゃぶり味わわれてしまう。

その快感に耐えかね、竿の力強い脈動が止まらない。

「あひひいっ、ああんっ！ 兄さんのチンポ、びくびく動いて……んうっ、匂いい……精液の匂い、してきてるわ。先っぽ、お汁も溢れて……ひふあっ、くううっ」

脈打つ剛直の先から乳摩擦で搾り出されるようにして溢れる、少し白濁した粘液。

赤黒く張った竿を伝って垂れていくそれが、巨乳の谷間を程よく湿らせていく。

グチュリと音を立てて汗と混ざり合い、その淫靡な香りが少年の鼻にも漂ってくる。

「はあ、す、凄い……奏のおっぱい、もうグチュグチュになって……」

こんな路地で、自らの妹の巨乳に肉竿を奉仕されている。罪悪感と、それを軽く塗り潰す気が遠のきそうな興奮で、もう頭の中が朦朧となってしまう。

縦長や横長に弾み潰れ、素早く揺れる巨乳。そこにじっと見入ってしまったっていると、奉仕を続けるメイド妹が、少し恥ずかしそうに瞳を泳がせながら問いかけてきた。

「兄さんも……やっぱり大きなおっぱいが好きなの？」

「えっ？ あ、あの、どうして……？」

「そういう趣味の男の人、多いみたいだから。学園でも、町を歩いていても……よく視線を感じるの。ここ……この下品なデカパイにい……」

アピールするように手でギュッと揉み潰される巨乳は、確かに学園の男子生徒の羨望の的。同じく巨乳で名を知られている副会長と、どちらが大きいのか。そんな下世話な話で盛り上がる連中を見かけたことは、一度や二度ではない。

「あの……そうやってエッチな目で見られるのも、興奮しちゃう？」

何となく複雑な気持ちを噛み締めながら問いかける兄へ、乳奉仕に没頭する妹は少しの間を置き、首を小さく横に振って返してきた。

「微妙……だわ。見られたいとも思うけど、でも……ところ構わず勝手に見られるのは、

あまりいい気持ちがないの……」

(やっぱり、露出趣味って言っても色々あるのかな)

ただ見られたいという、単純なものではない。その奥深さに、彼女の嗜好を完全に理解するまで時間がかかりそうだと苦笑した直後。

「でも……兄さんに見られるのは違う。……見られて……んふっ、はあ、こうして感じてもらえるの……嬉しい。はんっ、はあ、初めて……自分のここ……乳マ○コがいやらしい大きさをよかつたと思ってるわ、今。はあっ、んっ、はふっ」

「……えっ？ あ、あの……」

恍惚と吹き漏らした奏は、両手で鷺掴みにした巨乳を左右交互に揺さぶり始める。

カウパー腺液と汗に塗れた谷間から響く、グチュグチュと淫猥な音。もっちりとした弾力に包まれ、乳肌になつとりと舐めしやぶられるような快感が肉竿に走る。

理希は壁に預けた背筋を悩ましく震わせて浸りながら、今の言葉を反芻していた。

(嬉しい……僕に見られるのは……)

かなり歪んだ形ではあるが、それでも妹の気持ち伝わってくる、素直な言葉。

悦んではいけないとわかっているも胸が熱くなり、双乳に挟まれた剛直がますます勢いを増していくのを止められない。

「兄さん……早く。はあ、命令してくれないと……勝手に動いてしまうわ。欲しくて、我

慢できなくて……だから……んくうっ、はんっ、んあっ、あんっ！」

汗で濡れ、乱れたロングウェーブの髪の何本かを額や頬に張りつかせ、まるで年上のような妖艶な微笑みを浮かべてねだってくるクール妹。

そのうっとり潤んだ瞳を見つめていると、理性で抑えられる限界をはるかに上回る興奮が、お腹の底からこみ上げてきてしまう。

「して……奏。もっと激しく！ い、いっぱい奏のおっぱいで……乳マ○コで、僕のチンポしごいて!! 出るまで……精液、奏のおっぱいで射精させてよ！」

「ええ、んっ、頑張る……あふっ、もっと激しく……い、いっぱい扱くう……んう」

全身を上下に揺さぶるようにして乳摩擦を続けながら、奏はそのまま大きくうつつむき、唾液で濡れた唇で、谷間から飛び出す赤黒い龟头をパクツと咥え込んでしまった。

じっとり湿った乳肌とまるで違う、唾液に塗れた粘膜肉に一番敏感な場所を不意打ちで包み込まれる。その予想外の快感に驚き、理希は反射的に腰を突き出してしまった。

「むごおっ、んごおう……げほっ、ごほお！ ひうっ、んっ、んぐううっ!!」

硬く張った肉傘が、窄んでいた唇を乱暴にこじ開け、屹立の先が奏の喉粘膜に衝突するくらい深々と入り込んでしまう。

激しくむせるのに合わせ、唇の端からカウパーと混ざった唾液が大量に溢れ、それが火照る乳肌を伝って谷間に流れ込んでくる。



「ここにも……欲しいわ、やっぱり」

『兄さん専用マ〇コ』。

その卑猥な単語の下、しっかりと矢印で指し示されている淫裂。奏は反対の手をそこへ伸ばし、指先に少しだけ残っていた残滓を桜色の肉ビラに擦りつけながら呟き漏らす。

「そこに欲しいって、で、でも、あの！」

昨日も求められた、膣内への射精。どんな突拍子もない願いでも、この愛しい妹の求めなら聞き入れる覚悟を固めたが、それでも簡単には領けない最大の禁忌。

「お願い、兄さん。……まだ、夢みたくて信じられないの。兄さんが、私を一生愛してくれると約束してくれたなんて。それが現実だという証……ここに感じたい」

「で、でも、そうすると……できちゃうかも……」

「ええ、それが……一番わかりやすい、愛の証。こんなどうしようもない変態マゾでいいなら、兄さんの赤ちゃんを孕ませて……子宮まで、全部、兄さんの色で染めて欲しいわ」
戸惑う理希へ、奏はさっきまでの蕩けていた表情から一転、クールで落ち着き払った普段どおりの口調で懇願してきた。

快楽に流された勢いではない、心からそれを求めてくれていると真摯に伝わってくる態度に、想いをぶつけられた少年は気安く言葉を返せず押し黙ってしまう。

まだ学園生である自分達の立場。世間の目。今後の生活。何よりも兄妹であること。

その求めを拒絶する理由は、いくらでも思いつく。

だが……自分は誓ったのだ。どんな禁忌でも乗り越え、この想いを貫くと。こんなに早く折れてしまうと、自分を信じてくれる愛しい妹を不安にさせてしまう。

「いいんだね、奏」

「もちろんよ。……わがままばかりでごめんさい。こんな……あんつ、兄さんに種付けをおねだりする、悪い妹で。でもお……もう、無理、我慢できない……兄さんの女になった証が欲しくて、子宮が疼く……疼いて、切ないのおっ!!」

表情を少しずつ崩しながら、奏は割れ目に食い込んでいた荒縄を自らの手で大きく持ち上げて横へずらし、物欲しそうに開閉を繰り返す穴口をさらけ出した。

ゴボゴボと絶え間なく溢れ出す愛液に塗れた花弁も、先ほどまで肉槍に絡みついていた熱舌の動きを真似るように、小刻みに震え蠢き続けている。

言葉と身体。両方で熱心に求めてくる、最愛の妹。今、その期待を裏切ることこそ、何よりも彼女の気持ちに傷つけてしまう。そう確信し、少年は覚悟を決めた。

「それじゃ、しちゃうよ。奏のおマ○コ、いっぱいかき混ぜて……それで、な、中……子宮に出しちゃうから。妊娠させちゃう……からね」

「ふあっ、ああっ、してえ!! 早くうっ! た、種付け……兄さんに種付けされて、思いきりイキたい……孕んでイク! イキっぱなしになりたいのおっ!」

その宣告だけで軽く達してしまったのか、奏は机に尻肌を擦りつけるようにして腰を激しく左右に振り、浅ましいくらいに積極さで求めてきた。

クチィと音を立てて広がる肉裂から、限りなく透明に近い蜜液が少量吹き出す。期待だけで潮吹きまでしてしまっている愛しいマゾ妹へ、理希は気が遠のきそうな昂りを嘔み締めつつ歩み寄っていく。

「兄さん、ちゃ、ちゃんとこれも撮って欲しい。子宮まで兄さんのものにしてもらえるところお……記録しておきましょう。……ね？」

「うん。えつと、それじゃあ……」

言葉尻を濁して少し思案した後、理希は奏の隣へ寄り添うように腰を下ろした。

そのまま縄を回されている細い腰を両手で掴み、燃えるように火照った身体を軽く持ち上げて、自らの膝上に乗せてやった。

——ズププウツ、ヌブブツツ、ジュブリユルルッ!

「くうひいいいっ! ふあんっ、おおっ、くうっ、りゅっ……んひっ、ふあひいっ!!」

悩ましく緊縛された肢体が落ちてくるのに合わせ、迎えるように真っ直ぐ勃起していた肉槍が、愛液の涙を滴らせる膣壺を貫いていく。

跳ね上がる声に合わせ、幹胴を嘔み締めるように収縮する淫唇。

上の唇よりも圧倒的に力が強いのは、括約筋の影響か、それとも待ち望んでいた膣内射

精への期待がそうさせているのか。

「もっとおっ、お、奥うっ、くんっ、はあっ、はあ……見てえ……私、じ、自分で腰落として入ってる！ 兄さんのチンポ、オマ○コの奥まで食べちゃうのお!!」

奏は荒い吐息混じりの嬌声を叫びながら、まるでサンバでも踊るように熱く腰をくねらせ、そのまま一気に腰を落としてくる。

入口に負けない強さで、きつく圧迫してくる肉壁。固体と液体の中間のような、蕩けかけた粘膜肉が剛直に隙間なく張りつき、あつという間にしゃぶり溶かされそう。

表面に刻まれた肉皺の動きも、いつになく活発。一本一本が意志を持った舌のように絡みついてきて、雁首の裏側や裏筋の敏感なところを丁寧にくすぐられる。

「奏、オマ○コが動きすぎ！ こんな……やばっ、も、持たなく……んっ、くう」

「あはあ、いいのおっ、我慢しないで兄さん！ ここお、兄さんのザーメン穴だからあ……兄さんのザーメン、全部出していい穴なんだからあ!!」

急速に高まる挿入快感に悶える兄を肩越しに見つめ、奏はその柔らかい尻房を弾ませながら、身体をシェイカーのように揺さぶり始めた。

少年の太股をトランポリンのようにして跳ね、ロングウェーブの髪を振り乱す。

首筋や鼻先が柔らかい毛先にくすぐられ、漂う爽やかな香りにうっとり浸ってしまう。強すぎる官能に、理性が完全に崩壊してしまいうさだ。腰から痺れる快感に支配され、

少し慣れるまでは動けそうにない。

「兄さんうつ、はんつ、くうつ！ あはあつ、しゅごいいつ、くんつ、チンポお……生チンポ、奥にコンコン当たるうつ、し、子宮、ノックされてえ……んふつ、ううつ!!」

そんな兄とは対照的に、妹の動きは激しさを増す一方だった。

ようやく愛しい人と、結ばれることができた。その幸せを全身で表すような、腰振りダンス。普段のクールな姿の面影もない、淫らに蕩けた姿だ。

大きく見開かれて妖しい光を浮かべる瞳は、真っ直ぐレンズの方を見つめている。それを他者の視線と思ひ、過激に乱れる快感を更に深く味わっているらしい。

「奏、本当にエッチすぎだよ。んつ、お、奥……当たる度に、先っぽがチュツて吸われる感じする……子宮が、僕のチンポにディープキスしたがってるんだね」

このまま暴発してしまうわけにはいかないかと、理希は火照りピンク色に染まった妹の耳たぶに唇を寄せ、そこを甘噛みしながら囁きかける。

「くふつ、んんうつ！ しょ、しょおつ、んんうつ、はあうつ！ らつてえ、欲しい、早く欲しいからあ……くふつ、んつ、ふあつ、あひいいつ!!」

耳たぶを吸い、裏側にも舌を伸ばして舐めあげる。全身に火がついた今、そんな耳クンニでも相当の快感を得てしまっているのか、奏はだらしなく唇を緩めて喘ぐ。

端から垂れる唾液は、先ほどの強制口奉仕の名残でいつもよりもとろみが強く、糸を引

いたままダイナミックに揺れる乳脂肪に垂れていく。

縄で卑猥に歪められた爆乳は、その濃液や滲む汗を振りまくように、彼女自身の腰使いに合わせて揺れていた。腰を浮かすと重力で縦長に、少年の太股と尻房が衝突すると、自身の重みでグニユリと横長の楕円に潰れる。その魅惑の動きに気を引かれた理希は、半ば無意識の内に右手をその肉塊へ伸ばしていった。

「勝手にいっぱい動いちゃう……いけない子には、お仕置きしないと。ここ……このエッチすぎるおっぱいも、たくさんしつけてあげるからね！」

熱に冒されて呆然とする頭を必死に働かせて言葉責めしながら、揺れ動くふくらみを下から持ち上げるようにして掴んだ。

むにゅりと火照る乳肌へ指を食い込ませ、更に親指と人差し指の二本で、先端の乳首粒に取り付けられた洗濯ばさみを摘み、おもむろに引つ張ってやる。

「んくううっ、ひあっ、はひいっ！ ちいっ、乳首っ……そこおっ、くっ、やあ、ふあふううっ、んくっ、おおっ、んおおっ！ 取れりゅうっ……ひいっ、はひいっ!!」

桜色突起の根元が伸び、乳果実そのものも細長く形を変える。パネがかなり強めになっているのか、洗濯ばさみはそれだけ引つ張っても取れることはなかった。

かなり痛みがあるのではないかと気になったが、膣壁は快感を訴えるように波打ち、肉槍の隅々までを舐め味わうように圧迫してくる。

「凄いな、おっぱいをいじめてるのに、オマ○コまで動いて……」

「りゃつてえつ、くんつ、き、気持ちいい……そこおつ、先つぽ、ズキズキするの、痛いけど感じて……ひぎいつ、おほおつ、もおつ、くうんつ、ううつ！」

「痛い感じるなんて、本当に変態……マゾだね、奏」

「はあ、ふあひいつ、そおつ、マゾ……へ、変態マゾでえ……ごめんなさいいつ、んう、でも無理い……もおつ、が、我慢、無理いつ、くんつ、おほつ、おおつ！」

普段のクールで清楚な彼女しか知らない者が見たら、ショックで失神してしまうのではないか。そんな風にすら思ってしまうくらい、狂おしく悶える人気者の少女。

理希が乳頭の洗濯ばさみを引っ張り、耳たぶを強く吸いしゃぶる度、乱れた歓喜の叫びが艶やかな赤に染まった唇から飛び出す。

瞳は潤み、夢でも見ているかのような恍惚の表情。その昂りを訴え、もっと深く感じ入りたいと言わんばかりに弾む腰使いも激しくなってきた。

「ひいつ、んおおつ！ もおつ、こ、腰い……止まらないのおつ！ いっぱい、しゃぶる……オマ○コでしゃぶつてえつ、くひんんつ、はあつ、あふううつ!!」

ジュップウツ、ヌリユルウツ、ジュブリユウツ、ズブブツ！

発情しきつた雌穴を、力強く貫く水音。グチィと行き止まりの子宮口に亀頭が衝突すると、嬉しそうに震えるそこがわずかずつだが綻んできた。

「くあつ、ううつ、さ、先っぽが子宮に埋まつちやいそうだよ！」

透明の雄液を滲ませ始めた鈴口が食い込み、そこが断続的に強く締めつけられる。真芯を走る甘美電流で、竿の脈動が一気に激しさを増してきた。

臨界点間近。それを証明するように、根元にマグマのような熱感がこみ上げてくる。

「くんつ、兄さん、ビクビクう、オチンポ、ビクビクしてえ……きてえ！ 兄さんのチンポでしつけてもらったオマ○コに、いっぱい種付け射精してえ！ い、一生忘れられないくらい、熱くて激しい孕ませ射精い……んふうつ、欲しいいつ、欲しいのお！」

言葉に合わせ、更に一回り小さく狭まる蜜穴。

感度が最大まで高まっている男根に、その圧迫は決定的な刺激となる。

もう、この期に及んで悩みはしない。愛しい妹の——恋人の求めに応えたい。

「わかった……出してあげる！ 奏の奥に全部……くううつ！」

そう決断した直後、理希は力を振り絞り、痺れていた腰を突き出した。

ゴツゴツとした竿肌で入口の肉ピラも捲り、真っ直ぐで上品だった秘裂を成熟した魅力を漂わせる、卑猥な形に変えながら、深々と根元まで挿し入れる。

「くうつ、ひふあつ、ああつ、んうつ、あふううつ！ イイツ、い、いきなり、子宮……ズコズコきて……んほおつ、はあつ、はふうんんつ！」

「いいつ、くつ、出すよ、奏！ ちゃんと奥に……今日は奥に出す！ 赤ちゃん作るつも

りで、奏の子宮に出すから！ 子宮まで、全部、僕専用にするっ……しちやう！」

改めて宣言し、左手で太股に書かれた落書きを指差しながら、痺れる腰に最後の力を込めてズンツと突き出した。

既に限界まで収縮していた肉道を押し広げ、物欲しそうに震える子宮口と亀頭が、情熱的なディープキスを交わす。

「しゅきいっ、兄さん、大好きい……孕むうっ、大好きだから孕むのおっ、いっぱい孕んでイク……イグううっ！ きてえ、きてええっ!!」

身悶える妹の絶叫に合わせ、亀頭が埋まっていた子宮口が窄み、そこがむしゃぶり吸われる強い刺激で、目の前が絶頂の快感で白く染まっていった。

——ドビュルルルウツ、ビュルウ、ブブブブツ！

「おおおっ、くうんっ、ひいっ、あひいっ!! しゅごおっ、きいっ、きてりゅ、いっぱいいっ！ 奥に精子い……し、子宮に兄さんのチンポミルク、ドドプされてえ……んんふうっ、しゅごおっ、これ……孕むうっ、孕んでアクメえっ、ひいっ、んんっ！」

尿道を昇っていく熱液で、竿が更に大きくふくらんでしまいそう。

そんな錯覚すら感じてしまうくらい強烈な放精。

クール妹の魅惑の肢体の中、唯一マーキングを済ませていなかった肉室へ、そのすべてを遠慮なく注ぎ込んでいった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断複製は厳禁です。著作権者・発行元・編集者・デザイナーの許可なくしては、本誌の複製・転載・無断複製は厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!